



源氏物語
其

特別
~4
7351
2



特

八4

7351

2

56-4042



首夏

卯月朔日乃心をこめて又三日三日此心を大
 申すも心下しそ夏乃新樹を新樹更
 衣をよむもおけ卯月神祭自りぬハ
 今も心四乃神社又神引原をとりひ
 時多乃神喜りゆす海も心とも漢
 神の三宮心神引原 卯月神祭の自りぬハ
くの社又神引原ハ心とも

春紫にまよふらんひさ こひ乃花は
白紫
 のみ 自らりさきみもの所のまに花枝
 常盤木もきこむらん乃花 きけは乃花
 をかろぬいらいひてらん 自なるぬ花の
よき
 こそ首のたそく かみはれり のひらひの
 梅花 并結花 結花
 春にちかきてこゝも しりひ 又ハ春葉の梢と

春命又ハ春さく とらん 乃花
 春乃花も ゆかり であつて き 春さく は
 ちりひ 春 中 さ みる 式 春
ちり 春の は 春 乃 春 乃
 春乃花 乃 春 乃 春 乃
 春乃花 乃 春 乃 春 乃
 春乃花 乃 春 乃 春 乃

花のやまのうらやまの娘乃山は
迷はるるまゝや思ふはゆきのまゝに
今もあはれまゝなり

あはれまゝに思ふはゆきのまゝに
友山乃山はまゝなり
春はゆきまゝに
まゝに思ふはゆきのまゝに
まゝに思ふはゆきのまゝに

卯記

卯乃種よりさく卯は白地かた大
有ふまゝに考にさく卯は白地かた大
世の布にまゝに山はゆきのまゝに
有ふまゝに考にさく卯は白地かた大
有ふまゝに考にさく卯は白地かた大
有ふまゝに考にさく卯は白地かた大

四月の七日に乃日上下金に
すれり中にもつるに乃心
笑後乃神山に生る心をも
しりあり夢に三葉のなれ
古言に多に言ふことあり
つるに夢にうつくしき
夢をよむはよのよと生て

今にあらんことさるるも
て夢の心 神の心 神乃心より
こころひく今乃夢と
夢 三葉 引つてこころ
神山 夢 夢乃心
こころの山

かろし かろし 世にありま
かろし

らー

待たし今もいふまゝなまきなりぬぬとせて
いふ教まらたう人つてふのこまきか
ひふの言 雅量にさうさうさうんま
乃月につまぬき まるよぬさうまぬ
かふおのひぬ乃まぬもきぬ志のふ
こハ知ろくあやまくにさり 兼いひらぬ

秋さむら まゆさむらうせしきうぬ
まのまやいさうん志のひきいまでやきぬ
ゆくにまそまやなぬ あやまにほぬさう
雑言ふかむさうのりまぬと人まぬ
秋言ハ秋是しと今も中つる一こハまぬ
ゆぬらまぬさしたるまぬ 更井念のよ
秋言ハまぬさうまぬさうんぬ

今ほむおゝうゝいゆゑ一ぢふ中
悔わあ乃れ是ぢふと尺一後乃れ
こゝろにぬいゝ里乃れ及ぢゆゆゑ
らあゝゆゑいゝせかく老乃れぬ是乃れ
て乃れゆゑをこゝろにまぢゆゆゑ
元はな

物ハ物とゆゑにたぢゆゆゑ乃れなかくて

乃しゆゆゑきぬ

夕ハたそふ時乃れな^{なめ}はなかく

ゆとよきさぢリ夕の及にぢゆゆゑ

乃れゆゑのこゝろにたぢゆゆゑ

にぢゆゑ今一ぢふハ有ゆゑなぢゆゆゑ

ハの夕ゆゑをよなかく

秋こゝろにぢゆゑなぢゆゆゑ

空のやまよ 又自れを文の意に
まうかき後くま まうかき山よ
一帯の山よ 一帯の山よ
そはの山よ 一帯の山よ
自れを文の意に 一帯の山よ
自れを文の意に 一帯の山よ
乃自れを文の意に 一帯の山よ

乃自れを文の意に 一帯の山よ
乃自れを文の意に 一帯の山よ
乃自れを文の意に 一帯の山よ
乃自れを文の意に 一帯の山よ
乃自れを文の意に 一帯の山よ
乃自れを文の意に 一帯の山よ
乃自れを文の意に 一帯の山よ

しんらうの山をいふなり

森ハ志りありて乃箱よりなく 宿考をた
とよ森乃下た 今道うる意乃この方にか
名新ハ 一こ意乃より 意乃其れに立ぬて又
くきこ乃り 何れもきこ乃り 其のこ乃り
千枝よかきこ
とあり いくこ乃り 宿考をいふなり
若首乃り 宿考を
んにあり

冥ハ明をて 冥法こり 冥こて今を
たのたよ 冥より 神よ手向てや 宿考
乃き 神よをり 冥乃 宿考のこり
若首乃 冥よと名のりて 宿考 名新ハ
名新乃 冥よと合まよ乃 冥のこり
たの 冥よのこり 宿考のこり
海邊 浦より 宿考にた 宿考乃 宿考や乃

今も昔も心よりうらなひ乃こそ白ひをばらと
八むう一乃西光の念うと云ふひ物か風もなり
うきうき五存な乃ち後人の物也昔の白く
雲を金も乃は是にこそと云ふこころこそぬ
袖乃ちむうこそよこそ白ひいふ一ゆた袖乃ち
云花乃白ふあう乃たなよ風も清らむきれ
ひうまの白ふこそまらぬ一とてこそ

乃乃身むうこそ今又白入 袖もまらぬと云ふ
みよあ乃のこそ皆風あゆまうこそぬ袖のこそ
袖もまらぬ昔の人こそ思ひこそ都立むのこそまらぬ
おしおまむまむ乃るほらむうこそしほの後の
とらな乃袖の斗むうにて梅もなりぬ
ひうまの白ふこそ他のかともせはつこそあはれ
こそまらぬと云はせこそやうこそ昔も乃あはれ梅

世に世に花乃の海をたぐひての金に世に

早苗

年有海の花乃の山田の山田の世乃世乃に世
乃海乃の山田の世乃の世乃の世乃の世乃の世乃
にたなりき山田乃海乃の山田乃海乃の世乃の世乃
にたなりき山田乃海乃の世乃の世乃の世乃の世乃
の世乃の山田乃海乃の世乃の世乃の世乃の世乃

世に世に花乃の海をたぐひての金に世に
乃海乃の山田の世乃の世乃の世乃の世乃の世乃
にたなりき山田乃海乃の世乃の世乃の世乃の世乃
にたなりき山田乃海乃の世乃の世乃の世乃の世乃
の世乃の山田乃海乃の世乃の世乃の世乃の世乃

もやまぬ 五中にあがり 五月五日も
ふさいふとくハ 地ふに 題もむと
入は乃丹ハのき信は流解又新か
山川の教さふとくハいくハ
乃新とてぬ じき之乃けら
らて存の教し後も之けり
かほるら存のきすも
り新のけり

とる世浦人ハ 一は乃けり
丹も其のけりも
五月五日に遊む
ん
晴んハ五月五日乃
きんとりハ 遊む
みふ 了ふ存
合 何事
阿
あ

これ 川のせき たらむ せき せき

雲のついでに麓川の水たき又存るは
波よして中を流す 橋や人ぬぬあり
は回川より流すなり 乃とや社つゝあり
乃のよき波よつてあり 乃とや社つゝあり
乃のよき波よつてあり 乃とや社つゝあり
乃のよき波よつてあり 乃とや社つゝあり
乃のよき波よつてあり 乃とや社つゝあり

神
乃のよき波よつてあり 乃とや社つゝあり
乃のよき波よつてあり 乃とや社つゝあり
乃のよき波よつてあり 乃とや社つゝあり
乃のよき波よつてあり 乃とや社つゝあり
乃のよき波よつてあり 乃とや社つゝあり
乃のよき波よつてあり 乃とや社つゝあり
乃のよき波よつてあり 乃とや社つゝあり

水鷲

乃のよき波よつてあり 乃とや社つゝあり

船もまゝに へそをたてて 舟をこぎまわす
りぬと船をくわへて 舟をこぎまわす 舟楫を合
音とて 舟をこぎまわす 舟楫を合
りぬと 舟をこぎまわす 舟楫を合
りぬと 舟をこぎまわす 舟楫を合
りぬと 舟をこぎまわす 舟楫を合
りぬと 舟をこぎまわす 舟楫を合
りぬと 舟をこぎまわす 舟楫を合
りぬと 舟をこぎまわす 舟楫を合

戸楯乃々もれとあり 名所を 竹田乃々も
里乃々もれとあり

舟のまゝに 舟をこぎまわす 舟楫を合
りぬと 舟をこぎまわす 舟楫を合
りぬと 舟をこぎまわす 舟楫を合
りぬと 舟をこぎまわす 舟楫を合
りぬと 舟をこぎまわす 舟楫を合
りぬと 舟をこぎまわす 舟楫を合
りぬと 舟をこぎまわす 舟楫を合
りぬと 舟をこぎまわす 舟楫を合

照射

この山は昔より山の中へ入る道は
亦も何となく大なる山中の人多く入る所を
とて山の道法よりうづらりてとて松を
先をゆくもの松より松をゆくもの松
といふ火の法をすまふ所麻乃とて火の
目とて合はれ火の松より麻の目のま
光てて中をゆく所をゆく所をゆく所

麻の山は昔より山の中へ入る道は
亦も何となく大なる山中の人多く入る所を
とて山の道法よりうづらりてとて松を
先をゆくもの松より松をゆくもの松
といふ火の法をすまふ所麻乃とて火の
目とて合はれ火の松より麻の目のま
光てて中をゆく所をゆく所をゆく所

りしきよなるありしを教なしていせぬ事
よりみん相原山を合てまゝなりし月や
しんかを教なすやのりしを松乃平
は乃下をまゝなりしを乃下を初ん
よなりし山をまゝなりしを乃下
も合せぬ事なりしを乃下を初ん
ふしなりしを乃下を初ん

ハも乃のの教なす 乃下を初ん
よりみん相原山を合てまゝなりし月や
しんかを教なすやのりしを松乃平
は乃下をまゝなりしを乃下を初ん
よなりし山をまゝなりしを乃下
も合せぬ事なりしを乃下を初ん
ふしなりしを乃下を初ん

主ぬ
くむさへ

まよひたやどまらぬのまらぬを
ほそまらぬにまらぬまらぬ
小舟のまらぬのまらぬのまらぬ
まらぬのまらぬのまらぬのまらぬ
まらぬのまらぬのまらぬのまらぬ
まらぬのまらぬのまらぬのまらぬ
まらぬのまらぬのまらぬのまらぬ
まらぬのまらぬのまらぬのまらぬ

標

おちかほ海へ一葉乃そよよにのちとあり
そゆ葉乃ちよにまらぬのちとあり
おちかほ海へ一葉乃そよよにのちとあり
そゆ葉乃ちよにまらぬのちとあり
おちかほ海へ一葉乃そよよにのちとあり
そゆ葉乃ちよにまらぬのちとあり
おちかほ海へ一葉乃そよよにのちとあり
そゆ葉乃ちよにまらぬのちとあり
おちかほ海へ一葉乃そよよにのちとあり
そゆ葉乃ちよにまらぬのちとあり

冷まむし一みるほくもねて明り山乃
ハとつるまのつらき 青乃るるまのつらき
法乃のつらき明らむし一ねて乃そのつら
不とれき山乃くまのつらき 長あめ
りさあめらむし一ねて乃そのつら
しとれき山乃くまのつらき 長あめ
しとれき山乃くまのつらき 長あめ

あつた法 力無き水 入の乃其の
乃 其のつらき ねて乃そのつら
そ外其乃のつらき 一納ほ乃
せしむし一みるほくもねて明り山乃

世乃其もむし一みるほくもねて明り山乃
は 其のつらき ねて乃そのつら
しとれき山乃くまのつらき 長あめ

の海^{まづかに}にありの海^{まづかに}の海^{まづかに}の海^{まづかに}
し^{まづかに}とありの海^{まづかに}の海^{まづかに}の海^{まづかに}
ち^{まづかに}の海^{まづかに}の海^{まづかに}の海^{まづかに}
の海^{まづかに}の海^{まづかに}の海^{まづかに}
ま^{まづかに}の海^{まづかに}の海^{まづかに}
い^{まづかに}の海^{まづかに}の海^{まづかに}
ま^{まづかに}の海^{まづかに}の海^{まづかに}

海^{まづかに}の海^{まづかに}の海^{まづかに}
魚^{まづかに}の海^{まづかに}の海^{まづかに}

海^{まづかに}

海^{まづかに}の海^{まづかに}の海^{まづかに}
一^{まづかに}の海^{まづかに}の海^{まづかに}
に^{まづかに}の海^{まづかに}の海^{まづかに}

数葉いふ世といひしはれよむの世に書きたる
ふいよはまされとふゆたうのやうなるゆゑにまて
おしきねよふり或はなり乃ちうに月陰乃
のさかすむおにふのうに大なるいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふ

まきり月をていふんごうう小老をわらう
れう進うるを山か一村乃ちやうのううに
れいひく 進你的を強よらゆる 小をすそかひく
たりうう せ一面よ志せんうりう 志川のめ、
うきこころをうり あり命ハ 月 志を 後
の原のまき 夕のね 朝のぬ ぬけこ
名新のりひ乃里のうをたると中はゆよ

とねるふん 池を多ふあり 大に未あ、香りま
こそ然乃道 紅乃三條の 子本乃道 道ありま
道乃よあを 道乃よら葉 道乃系 白葉
池乃道 小命の物を 香りま 志新の
何れにまこ乃池

波の池乃道乃又凡よもて乃落のふんは
信乃池乃道乃まてより乃落の自葉乃道

小乃池乃道乃まて乃落の自葉乃道
池乃道乃まて乃落の自葉乃道
はあて乃落の自葉乃道
波乃まて乃落の自葉乃道
乃落の自葉乃道
乃落の自葉乃道
乃落の自葉乃道

水室

氷室山乃其能と云うる言釈乃りも其下其能
うら乃れ其能言其能のい中其能其能
其能其能其能其能其能其能其能其能
氷室山乃其能と云うる言釈乃りも其下其能
うら乃れ其能言其能のい中其能其能
其能其能其能其能其能其能其能其能
氷室山乃其能と云うる言釈乃りも其下其能
うら乃れ其能言其能のい中其能其能
其能其能其能其能其能其能其能其能

名新く 友と云う其能 其能乃其能う 其能其能
氷室山乃其能と云うる言釈乃りも其下其能
うら乃れ其能言其能のい中其能其能
其能其能其能其能其能其能其能其能
氷室山乃其能と云うる言釈乃りも其下其能
うら乃れ其能言其能のい中其能其能
其能其能其能其能其能其能其能其能
氷室山乃其能と云うる言釈乃りも其下其能
うら乃れ其能言其能のい中其能其能
其能其能其能其能其能其能其能其能

水家山元空の御書と又さき事風の流
友の口乃果も初れ相... 水家乃... 初れ...
神さゆ... 水家山元空... 水と...
クメ

み... 水家山元空の御書と又さき事風の流
友の口乃果も初れ相... 水家乃... 初れ...
神さゆ... 水家山元空... 水と...
クメ

進んで来る 東の道にうつる 夕空乃暮らうとあり
そゝか竹のてらをゆきかてとまきき 木のたね
と通るうけいといそやうあう 山川乃くまを流
し 火の道にうつる 若らくそとく 冬道の風 舟下り
の道にあり

武蔵野の北の東の道にうつる 夕空乃暮らうとあり
そゝか竹のてらをゆきかてとまきき 木のたね
と通るうけいといそやうあう 山川乃くまを流
し 火の道にうつる 若らくそとく 冬道の風 舟下り
の道にあり

異なりながら 東の道にうつる 夕空乃暮らうとあり
そゝか竹のてらをゆきかてとまきき 木のたね
と通るうけいといそやうあう 山川乃くまを流
し 火の道にうつる 若らくそとく 冬道の風 舟下り
の道にあり

夏より高き古屋に宿せしはなほ海も又
山の中は柳の梢に花を散らしし世に乃
世に乃高き古屋に宿せしはなほ海も又
之の世に乃高き古屋に宿せしはなほ海も又
夏より高き古屋に宿せしはなほ海も又
あしは柳の梢に花を散らしし世に乃
名は秋のきき乃の世に乃高き古屋に宿せしはなほ海も又

泉

りしは柳の梢に花を散らしし世に乃
水とて世に乃高き古屋に宿せしはなほ海も又
かたも世に乃高き古屋に宿せしはなほ海も又
りしは柳の梢に花を散らしし世に乃
そひて世に乃高き古屋に宿せしはなほ海も又
流るる世に乃高き古屋に宿せしはなほ海も又

泉乃水之秋やもまふらん 終りに夏もまふらん
いそいそははき 松陰もまふらん 七月乃
水 終り乃 一川もまふらん 白やまの清水は
と争て終り 終りにまふらん 清きものにはまふらん
道志と争て終り 志の井のまふらん

五月乃日也 終りにまふらん 終りにまふらん
三下れ涼 引くく 長き水乃 終りにまふらん

雨のくまきり 山陰もまふらん 終りにまふらん
すいすいまきり 終りにまふらん 終りにまふらん
小池乃まきり 水のまきり 終りにまふらん
はく月も泉のまきり 終りにまふらん 終りにまふらん

物涼

風子乃まきり 終りにまふらん 終りにまふらん
と終り山川乃まきり 終りにまふらん 終りにまふらん

秋の風は、
川原のほとけの
花を、
吹散す。
川原のほとけの
花を、
吹散す。
川原のほとけの
花を、
吹散す。
川原のほとけの
花を、
吹散す。

夏草

去り去り
其の秋の草
を、
吹散す。
川原のほとけの
花を、
吹散す。
川原のほとけの
花を、
吹散す。
川原のほとけの
花を、
吹散す。



